

## 『ユリシーズ』とパリ

—— 1920年代の文学風土をオデオン通りに訪ねて ——

### 北 田 敬 子

アイルランド出身の小説家 James Joyce が彼の代表作 *Ulysses* を完成させ出版に漕ぎ着けたのは1922年、パリに於てであった。多様な言語技法を駆使し、人間の生活のあらゆる局面を表現し尽くそうとするこの大胆な実験的作品は20世紀の文学に大きな影響を及ぼすこととなった。けれども *Ulysses* という作品に勝るとも劣らず興味深いのは其の出版を手がけた一人のアメリカ人女性の存在である。

1919年から1941年までの20年余り、パリのセーヌ左岸に位置するオデオン通りに英語の書籍専門の貸出文庫兼書店 Shakespeare and Company という本屋を開いていた Silvia Beach (1887-1962) は、1920年代にパリに離合集散を繰り返す気鋭の芸術家達にまたとない出会いの場を提供する希有な才能の持ち主であった。彼女の鑑識眼と比類無い献身的努力無しには、作家 Joyce も小説 *Ulysses* も果して今日にまで続く名声と評価を獲得することが出来たかどうかはなほだ疑わしい。Joyce の強烈な egocentricism に怯むことなく、Joyce 一家の法外な経済的要求にたやすく音をあげることもなく、またアメリカやイギリスで猥褻文書の烙印を押されている発禁処分の本を出版しようとする試みに対する様々な妨害や中傷にも屈服せず Silvia は *Ulysses* の世界最初の出版者となる困難な仕事を引き受けた。それと同時にオデオン通りの筋向いにフランス語専門の同様な貸出文庫、書店 La Maison des Amies des Livres を開いていた Adrienne Monnier という同性のパートナーと共に当時パリで行なわれていた新奇な実験芸術や小雑誌の発行、また新進作家達のデビューにも力を貸している。未だ世に広く知られてはいなかったアメリカ文学の精華をフランスの、ヨーロッパの読者達に紹介して行くのも Silvia が情熱を傾けていた重要な仕事であった<sup>(1)</sup>。Silvia の店でアメリカの、所謂「失われた世代」の作家達は Joyce に接し、フランスの作家達に引き合わされ、やはりパリ在住のアメリカ人女性 Gertrude Stein のサロンへ導かれ、本国に留まっていたは果たせなかった出会いと文学、芸術活動の前衛との接触を経験することになった。

Joyce が *Ulysses* の生みの親なら、その産婆役と乳母の役を勤めたとも言うべき Silvia Beach。異郷で单身、書店経営と出版事業を行ない、人々のネットワークの要となっていたこのアメリカ人女性の仕事ぶりには一文学作品の誕生と受容の歴史が重なり、*Ulysses* より

更に難解な Joyce の *Finnegans Wake* へ通じる道が隠されているように思えてならない。表に姿を表わすことこそ少ないものの作者とテキストと読者を繋ぐ人物の存在意義を Silvia Beach は秘かに、しかし確実に我々に伝えている。彼女が体現するものは一体何なのか、Silvia Beach という名前は *Ulysses* にとって、また Joyce にとって何を意味するのであろうか。Silvia の颯爽たる風体と行動力の芯には例えば〈自由の希求と芸術への献身〉とも呼ぶべきものがある。それはおよそ経済原則に基づいた商業活動としての書店経営ないしは出版業とはかけ離れたものであるし、家庭生活を是とする女性の価値観とも全く相入れないものである。これ迄 Silvia は常に *Ulysses* 出版の裏方、ないしは黒子としていわば Joyce の名声の添え物程度にその活躍と仕事が人々の関心を引いてきた人物ではあった。だが自身は芸術の創造者でない Silvia には芸術家とは異質の、むしろ芸術家たちを凌駕しさえする吸引力が有る。そして何よりも Silvia の生きた時空が彼女の持てる資質を最大限に開花させたといわざるを得ない。今世紀の両大戦の狭間に生み出された解放区のごとき20年代のパリの祝祭的雰囲気の中で、Silvia Beach は女祭司と呼ばれるには余りにも地味な存在ではあるが、尚看過し得ぬ時代の申し子であろう。

*Ulysses* の末尾、第18章および作品全体に肯定と寛容の響きを放つ “Yes.” の後には

Trieste-Zurich-Paris

1914-1921

の記載がある。1986年の出版以来、*Ulysses* の「決定版」をめぐる新たな論争（およびスキャンダル）を提供している Hans Walter Gabler 編の “The Corrected Text” はわざわざそこに1610（行目）という数字を付けて、テキストの真の結語のありかを主張している<sup>(2)</sup>。Joyce が自らの作品執筆の軌道をも作品の中に組み込んで、創作活動の一切合切を今生に刻印しようとする執念とも読み取れる一句である。*Ulysses* が描くのも *Ulysses* を生み出すのも大なり小なりの都市であること——もっともこの結語には含まれない更に重要な場所があることも含めて——を読者は意識の外に置くことを許されない。そもそも Joyce が *Ulysses* の題材に採ったのは20世紀初頭のダブリン、その執筆に没頭したのは旧オーストリア領（現イタリア領）トリエステおよび第一次大戦中疎開を強いられていたスイスのチューリッヒ、断章を発表したのはニューヨークの文芸雑誌 *The Little Review*、そしてそれを完成させ出版に漕ぎ着けたのがパリということになる。どこまでも20世紀の都市生活者の所産である *Ulysses* が都市の放つ臭気と汚穢に無縁であろうはずがない。パリが *Ulysses* を引き受けたことは都市パ

りの成熟の証ともいえよう。

1922年にパリで *Ulysses* が一冊の本の体裁をとった時、Joyce は40歳。妻に一男一女をかかえる家族持ちの、故国離脱者 (exile) であった。*Ulysses* 出版の経緯と、出版の舞台裏をのぞいてみると、1920年代パリの文学風土が鮮明に浮かび上がってくる。当時のパリは、堅固な伝統に支えられたフランス文学の砦であるのみならず、むしろ多彩な流浪者達の拠点であり、多岐にわたる芸術活動の実験場であった。Dadaism しかり、Surrealism しかり、新音楽しかり、舞踏芸術、写真芸術しかり。Joyce をパリに誘ったのはアメリカの詩人 Ezra Pound である。仕掛人 Pound の手引で Joyce は時代の表に姿を現し、*Ulysses* を世に送り出すことによって20世紀の言語芸術の分野に特異な地位を占めることになる。パリに漂着した Joyce に生涯最後の約20年間をまがりなりにもそこに「定住」することを可能にしたのは、1920年代から30年代にかけてすさまじいまでに活況を呈していたパリの「モダニズム」に対する許容量の大きさ、深さというものであったはずだ。しかし、繰り返すまでもなく *Ulysses* 出版に際しての最大の功労者は Silvia Beach というアメリカ人女性である。彼女の Shakespeare and Company 書店はもともとこじんまりした貸出文庫であったものが、パリに出て来たばかりの Joyce を文庫の会員に受け入れた頃から、にわかに世間の耳目を集めるようになっていく。オデオン通りの Silvia の店はパリに開かれた英語文学の世界への窓であり、多くの作家達、読書家達の出会いの場所であった。第一次大戦後次第に数を増してきた「パリのアメリカ人」達、とりわけ Hemingway を筆頭に Sherwood Anderson, John Dos Passos, Scot Fitzgerald といった作家達が長居するにせよ通過するだけであるにせよ、パリへ来れば立ち寄るのが Silvia の店であったことはよく知られている。例えば Hemingway が遺作「移動祝祭日」(*A Movable Feast*) に描くことになるパリの街と、その重要な点描の一つとして出てくる Shakespeare and Company 書店には、若い駆け出しの作家が空腹をかかえて、希望と絶望に苛まれながら、いかに Silvia の手助けと激励がありがたいものであったかが淡々と綴られている。Silvia は Hemingway に出版社からの小切手の入った郵便を手渡して、「じゃ、すぐ家へ帰って、昼御飯をおあがりなさい」と彼の暮らしぶりを案ずる物腰やわらかな女性として登場する。

当時、私には本を買う金がどこにもなかった。で、シェイクスピア書店の貸本文庫から本を借りてきた。それはオデオン街12番地にあるシルヴィア・ビーチの貸本屋兼書店であった。冷たい風の吹きさらす通りにあったが、ここはあたたかくて、陽気な場所であった。冬には大きなストーブがあり、また本を置いたテーブルや棚があり、ウィンドウには新しい本が置かれ、壁には現存の、あるいは故人となった有名な作家の写真が掛

けてあった。写真はすべてスナップのようで、もう死んでしまった作家でも、まるで現実に生きているように見えた。シルヴィアは、いきいきした、くっきりと彫りの深い顔をし、その鳶色の眼は小さな動物のように生氣があり、少女のように快活だったし、ウェーブした茶色の髪は、りっぱな額からうしろへなでつけられ、耳の下のところ、ちょうど彼女の着ていた茶色のピロードのジャケットのえりの線のところで、ふさふさした毛がカットされていた。彼女はきれいな脚をしていた。親切で、陽気で、物事に興味が深く、冗談を言ったりゴシップを話すのが好きだった。私の知り合いの中で彼女ほど、私によくしてくれた人はいなかった<sup>(3)</sup>。

Silvia は Hemingway にだけ「よくしてくれた」のではなく、援助を必要としていた者達には誰彼無く援助の手を差し伸べる。アメリカからパリにやってくる新進気鋭の芸術家達が Silvia に助けられて幾人もデビューを果たした。そのささやかな店の二階に下宿していたのは、「バレエ・メカニック」という奇想天外な実験音楽の作曲者 George Antheil 夫妻であった。後にはカンボジアの皇子が同所へ住まうことにもなるといったぐあいに Silvia と交流を持つ人士は幅広い。けれども Silvia の情熱とエネルギーの大方を吸い尽くしかけた怪物はやはり Joyce その人に他ならない。

Silvia Beach がはじめ Dupuytren 通り 8 番地に Shakespeare and Company 書店をひらいたのは30歳そこそこの頃。彼女は独身主義者でユーモアのセンスにあふれた小柄な、魅力的なアメリカ娘であった。写真でみると、Hemingway の言を待つまでもなくボブヘアーにミディアムサイズのスカートをはいたところは現代にも十分通用する正真正正のモダンガール。彼女が書店経営という現実的なビジネスを生業とし、かつ文学者達に交流の場を提供し、自らもパリで芸術活動の現場にフットワークも軽くしばしば出入りし、おまけに *Ulysses* 出版事業——それはとりもおさず Joyce 一家の面倒を見ることに他ならなかったのであるけれども——を誠実にこなしてゆくことは、並み大抵の技ではなかった。注目すべき彼女には充実した人間関係を維持してゆく力があったこと、わけでも Adrienne Monnier という同性の同業者が生涯のパートナーとして存在していた点である。やがて Dupuytren 通りから Silvia が越してきたオデオン通りに、Shakespeare and Company 書店に先んじて Adrienne が経営していた *La Maison des Amies des Livres* は小雑誌も出せば、しばしば詩や散文の朗読会を開き、これはという本の出版も行っていた。*Ulysses* のフランス語訳を1920年代の9年間をかけて行ったのは Adrienne の書店であるし、1921年に Valery Larbaud の抄訳と講演による「『ユリシーズ』の夕べ」を主催したのも同じく Adrienne である。(1925年に Monnier の発行する雑誌 *Navire d'Argent* が Joyce の *Finnegans Wake* となる *Work in Progress* のうち 'Anna

Livia' の章の英語版を誰よりも先に掲載したことも付け加えておく必要があるかも知れない。) *Ulysses* は英語の原文で読んでこそその本懐に入ることが可能とは言い条、各国語訳の先鞭をつけ、最も初期の段階から同作品の理解者たりえたのはフランス人達だったと言える。Adrienne はそのフランス人の代表であり、Joyce の才能に対する Silvia の情熱を誰よりも理解し共感し得た人物と認識して間違いなかろう。

極く一部の文学者達に熱狂的に読まれていたとしても、*Ulysses* の前途の多難さが軽減されるわけではなかった。1921年に第13章（通称「Nausicaa の章」）まで連載が進んだところで *Ulysses* はニューヨーク悪徳防止協会に訴えられて猥褻文書の烙印を押され、以降1933年までアメリカでは発禁処分となる<sup>(4)</sup>。*Ulysses* がアメリカでもなくイギリスでもなく、ましてやアイルランドではさらさらなく、フランスでのみ出版が可能だったことは実に興味深い点であろう。1920年代のパリに Silvia が書店を開いた最も切実な理由は、第一次大戦後のドル高、フラン安にあった。本当は Silvia はニューヨークにフランス語の書籍を扱う本屋を持ちたかったのであるけれども、それは資産家でも何でもない彼女には不可能なことであった。そこで逆の発想からパリで英語出版物取扱い店を開くことになったわけである。そして、英語の国々で拒否される *Ulysses* を引き受けることで Silvia が経済的に潤ったのかと言えば、さにあらず。禁書であったが故の逆効果でセンセーション（とスキャンダル）を巻き起こしたのはものの、*Ulysses* はもとより読み易い本ではないし、作り易い本では全くなかったのが事実である。初版を作る段階で Silvia は Joyce の無制限の推敲、校正を許した。作家と印刷所の間にはさまって、採算度外視の労力がそそぎ込まねばならなかった。よく繰り返されるエピソードに、フランス人の印刷工は英語が読めなかったからこそ *Ulysses* の煩雑で猥雑な原稿を活字に起こしてゆく作業に耐えられたのだというものがある。印刷所に送る清書原稿のタイピスト達が作品の内容に憤慨して何人も選手交替し、遂には Silvia Beach の妹までかり出されなくてはならなかったという話も有名である。ではあるけれども、Silvia Beach の Shakespeare and Company を基地にして、初版の限定1000部は予約者を募り、世界各地に発送されて行った。

Silvia の店に出入りした20世紀の文学者達、芸術家達をただ列挙するだけでも、キラ星の如き華麗な名前が並ぶ。しかし、Silvia は20年代に精力の大部分を Joyce と彼の *Ulysses* の為に費やしていた。何故それ程までに Joyce なのか、*Ulysses* なのだろうか。人が何か、或いは誰かに惹かれるという現象には不合理で不可解で、しかし無視できない磁力の如きものが作用しているとしか見えないものがある。Joyce という作家には強力な磁力が働いている。読者は彼を徹底して嫌うか、ぞっこん惚れ込むか、少なくとも彼のテキストを精読した経験の有る者ならば両極に分かれるであろう。Joyce は手法にしても主題にしてもまことに

egocentric な作家である。*Ulysses* という小説は迷路ともビックリハウスとも詩とも音楽とすらいえそうな、一種の百科全書であるからそのテキストに魅了されない限り、「読む」行為は苦痛以外の何物でもない。ところがいったん魅了された読者は Joyce その人にまで曰く言い難い魅力を感じ、いつしか Joyce マニアに変じて、本来実在するはずのない小説世界を求めてダブリン詣出をし、物語の展開する 6 月 16 日を “Bloom’s Day” などと呼んで、一年のうちで何か特別な日でもあるかのように Joyce がらみの event を企てたり、個人的に秘に小説の進行する時刻をなぞってみたりすることになる。*Ulysses* をリアルタイムで朝 8 時頃から翌未明までかけて読破するなどと言う酔狂な試みもまことしやかに行われている。通俗的表現を恐れずに言うならおそらく Silvia Beach は「元祖・Joyce マニア」だった。別の言い方をするなら、筋金入りの「Joyce ファンクラブ・初代会長」といったところか。故に、どの研究書、一般書の体裁をとった Silvia Beach と Shakespeare and Company 書店にまつわる本をひもといても、一時期 Joyce 側近中の側近だった女性である彼女が、性的な意味で Joyce と親密な関係にあったと言う記録は皆無である。400 頁余りを費やして Silvia Beach と 1920 年代、30 年代のパリ文学風土を活写する Noel Riley Fitch の本は

MY LOVES WERE Adrienne Monnier and James Joyce and Shakespeare and Company,” proclaims Silvia Beach. This book is the story of these three loves<sup>(5)</sup>. (sic)

という文章で始まっている。ここでいう “three loves” の指し示すところが三種三様であり、決して単純なものでなかったことは想像に難くない。いかにも、Silvia は Adrienne とのパートナーシップの面から女性同性愛者的ニュアンスを漂わせている。——とはいえ、1920 年代に公然とレズビアン・ラヴを実践していたラディカルな女性達とは一線を画しておかなくてはならないだろう。ちなみに、1920 年代のパリで最も威勢の良かった女性の一人、ユダヤ系アメリカ人作家 Gertrude Stein とその伴侶 Alice B. Toklas というカップルのライフスタイルと Silvia (および Adrienne) のそれとは決定的に違う。Silvia も Adrienne も芸術の創造者ではなくて、名鑑定家 (connoisseur) であり書店経営に携わるビジネス・ウーマンであった。ただ、Silvia はこと Joyce に関しては全く採算を度外視した奉仕に明け暮れていた。*Ulysses* を一冊の本に仕立てて世に送ること、*Finnegans Wake* の執筆に没頭し始めた Joyce と Joyce の家族の常道を逸した経済上の要求に応じること、再三再四眼疾に苦しむ Joyce の世話をし続けること……そしてやがては版權の問題で Joyce に切り捨てられるようにして決別の日を迎えるにもかかわらず、*Ulysses* 騒動を彼女の人生の最良の日々と認めて生涯変わらず芸術家 James Joyce の支持者であったこと等を考え合わせると、とりわけ

1920年代のパリ、オデオン通りで Joyce と Silvia の間に通い合っていた磁力は、作家 Joyce に対峙する個々の読者の感ずるものと何か共通の要素を持っているのではないかと思わずにはいられない。すなわち、Silvia は先ず Joyce の最良の読者であったこと。批評家でも学者でもなく、何よりも Joyce の愛読者であったこと——真の意味での Joyce の愛読者たることは、作家との中途半端な交渉では済まされないところへと人を導いてゆくだけでも——を押さえておく必要がある。

先に述べた、前衛中の前衛を自称し、ピカソにまことに力のこもった大きな肖像画を描かせ、小説家 Hemingway の育ての親の如き存在であった Gertrude Stein——彼女は近年本国アメリカでとみにモダニストとしての高い評価を得るようになって来たと言われている——は、Joyce を激しく憎み、ライヴァル視し、Silvia が *Ulysses* を出版することになるのを知ったとたん、わざわざ Shakespeare and Company 書店に出向いて貸出文庫の会員をやめると宣言した。Silvia と Gertrude は Joyce をめぐって対称的な態度を取った二人の女性たちと言えるであろう。Stein は彼女の自伝的作品、*The Autobiography of Alice B. Toklas* の中で僅かに宿敵 Joyce に触れてこう言っている。

Picasso never wished Braque away. Picasso said once when he and Gertrude Stein were talking together, yes, Braque and James Joyce, they are the incomprehensibles whom anybody can understand. Les incomprehensibles que tout le monde peut comprendre<sup>(6)</sup>.

「誰にも理解できる不可解のきわみ」——とでもいったところであろうか。要するに Stein は Joyce の作品の多弁ないしは駄弁を軽蔑し、その沸き返るようなことばの饗宴を認めなかった。同じ頃、Silvia 以外にも Joyce を陰で支えているもう一人の女性がいた。Harriet Shaw Weaver というイギリス人女性である。彼女も断じて Joyce のロマンスの相手ではない。資産家の女相続人にしてコミュニスト的傾向を持つ身の故に、自分の財産を自身が使うことを潔しとせず、不遇な芸術家達の後援者となる道を選んだ人物で、雑誌 *Egoist* 誌の出資者でもあった。彼女は長年にわたって Joyce のパトロネスを務め、本人は厳格な禁酒主義者であるため大酒飲みの Joyce に対する不信の念を常に持ち続けながらも、イギリスでの *Ulysses* 出版に奔走していた。Virginia と Leonard Woolf 夫妻の Hogarth Press に *Ulysses* を持ち込んで門前払いを喰うのがこの Weaver 女史である。やがて Silvia と Weaver 女史は出会い、肝胆相照らす仲になってゆく。1988年に出版された Brenda Maddox の異色の Joyce 伝、*Nora*（これは Joyce の妻 Nora Barnacle に光をあてて作家 Joyce の実像に迫ろうとする斬新で thrilling、しかし批判も多い書物であるが）を読むと、精神を病む Joyce の娘 Lucia の治療

と保護のためにパリとロンドンおよびダブリンで Silvia と Weave 女史の心を尽くした連携プレーが如何に行なわれたかが明かされている。

この様に、Joyce を表舞台に引っ張り出したのは Ezra Pound であり、フランスへの *Ulysses* 紹介に活躍したのが Valery Larbaud であり、しきりに Shakespeare and Company 書店に出入りしながら Joyce との交流を肥しにしてやがて時代の寵児になって行くのが Hemingway であり、*Ulysses* に関する初期の最も優れた批評・解説を行なったのが T.S. Eliot であったとしても、実際に「出版」という困難な仕事を引き受け、Joyce の生活を援助していたのは Silvia Beach であり、Harriet S. Weaver であり、遠くアメリカで出版差し止めになった *Little Review* 誌を主催し裁判所で闘い続けていた Margaret Anderson 女史や Jane Heap 女史などという女達であったことは注目には値するのではあるまいか。同時に彼女達のいずれも、Joyce の妻 Nora の敵になることがなかった点も見すごせない。ついでに言うなら、Joyce の主治医も Silvia の紹介した女医であった。私生活での Joyce の Nora への全面的な依存はいうにおよばず、Joyce のいかに女性達に負うところが多いかは Joyce の全作品に於ける女性的な要素について考える際の重要な手がかりになるはずである。

*Ulysses* の最終章が主人公 Leopold Bloom の妻 Molly の半睡眠状態の、朦朧とした意識の流れを殆ど区切れ無しに書き表したものであることは周知の通りである。そこに横溢する奔放な性的イメージが、*Ulysses* をポルノグラフィと人々に認識させかねず、例の両極端の反応を読者に呼び起こす一因ともなっているのも確かであろう。Stein も、そして Virginia Woolf も Joyce を激しく嫌う。Woolf の日記には彼女の Joyce に対するあからさまな侮蔑の念と、たまたま同年生まれであり同年に没することになる完璧な同時代の作家への強い関心の働いていることが読み取れる。Woolf を筆頭に Joyce が当時の London の文壇の主流には断固拒否されていたことと比較してみると、Silvia Beach がパリでいち早く *Ulysses* の価値を認め、フランスの友人達の力添えで出版を実現させたことの意義がより明らかになるであろう。フランスにはイギリス小説の伝統も所詮他国の問題である。フランスで Joyce はイギリス・アイルランド間の確執から自由でいられたし、イギリス以上に禁欲的な文化傾向を強めていた20年代のアメリカのモラルティーからも自由であった。両大戦間の20年代に大挙してフランスの文化の香りを嗅ぎにパリへやって来ていたアメリカ人達の水先案内人を勤めていた Silvia Beach が、英語圏とフランス語圏の文化の間に立って、祖国離脱者の雄 James Joyce を時代の看板に押し立てたものと言えないであろうか。そしてまた、Silvia は Joyce の書く言葉に尽きぬ興味を示すことこそあれ、「猥褻」といったレッテルや *Ulysses*——すなわち世界の描写——のある一要素だけに過剰反応や動揺を示すことの無い、極めて強靱な、否、それ以上に柔軟な、感性和知性の持ち主であったことがうかがえる。パリ20年代の風俗、実



験芸術の数々が Silvia を鍛え、加えて *Ulysses* のテキストが前時代までの固定観念にとらわれぬ読み手にとっては開かれた、いかようにもそこに自らの意識を参入させることのできる器であることを Silvia は素早く察知して是認したものと思われる。

しかし、そのような新しいタイプの読者となるには、Silvia は様々な旧弊から脱け出していなくてはならなかったはずである。Fitch によれば Silvia はその私生活において、姉や親友の結婚に対して、賛否の感情を持つことはあっても、自らの生涯の独身生活を極めて肯定的に受けとめていたようである。「そう、私は自分の人生にいろいろな幸運が重なったと思うわ。ちがうかしら？ そしてその最たるものは私が結婚していないってことよ。」(Fitch p. 282) と発言している。読者・出版者・後援者・友人、としての Joyce との関係がきわめて良好だった時期はおそらく1920年代に限られるのであろうが、Silvia が Joyce に入れ込むことができたのは、やはり彼女の女性としての立脚点と深くかかわっているはずである。つまり Adrienne との関係を基礎にした、性役割にとらわれない自由な立場で活動する解放され、自立した女性の姿が大きくクローズアップされなくてはならない。Joyce はそのような女性、Silvia Beach のエネルギーの恩恵を誰よりも受けた作家となった。Silvia が有能な文学の鑑識家であり promoter であるとしたら、Joyce は最も鋭敏な女性の鑑定家だったのかも知れない。Joyce はおのれの強烈な egocentricism の故にどの男性が経営する出版社とも紛争を続けることしか能がなかったけれども（彼の初期作品をめぐる出版のゴタゴタを思い出してみれば一目瞭然である）、Silvia は Joyce の ego の内側に我が身を浸透させて働くことができた。Joyce にはそのことが最初から直感でわかっていたに違いない。Joyce の妻 Nora は夫の作品に全く無関心だったことで有名である。そしてまた Joyce の描く女性の大部分が Nora の中から紡ぎ出されたに相違ないこともよく知られている。しかし、Nora とは全く異なるタイプの女性の手助けがなかったら、Joyce が *Finnegans Wake* を書き終えるまで実際に作家としても人間としても生き延びられたものかどうか実に怪しい。もっとも判じ物のようにして *Ulysses* なり *Finnegans Wake* なりに Silvia およびその仲間達が顔を出す以外、Joyce はこのタイプの女性達を作品に登場させることはないし、いずれ誰彼となく諍いの相手となって行くのも事実である。にもかかわらず Silvia は作品の外側で、自発的に Joyce の支え手の一人となることを志願した女性の筆頭に位置するのである。

Silvia が Shakespeare and Company 書店を構えていたのは1919年から、ドイツ軍がパリを占領した1941年までのことである。1941年は奇しくも Joyce が亡命先、スイスのチューリッヒで死んだ年でもある。20年余りに及ぶ Shakespeare and Company 書店の歴史の前半10年間は、とりわけ活気に満ちたものであった。Silvia と Adrienne それぞれの回想録には当時両書店に出入りしていた有名無名の人々のエピソードが満載されていて、しかも1920年代の多

様な文学運動の詳細な記録にもなっている。わけても Silvia が強調するのは20年代に生まれては消えて行った幾多の小雑誌の重要性である。たとえば Ford Madox Ford と *transatlantic review*, Ernest Walsh の *This Quarter*, Eugene Jolas と Maria Jolas 夫妻の *transition*——これらはいずれもパリに現れた英語の雑誌である。そして Adrienne の店から出版されたフランス語の *Commerce*。この雑誌の編集者は Paul Valéry, 編集協力 Valéry Larbaud, Léon-Paul Fargue という顔ぶれで, *Ulysses* の最初のフランス語訳が載ったのもこの雑誌である。1927年に創刊された Jolas 夫妻の *transition* には Silvia の勧めによって Joyce の *Finnegans Wake* がまだ *Work in Progress* という仮題のまま掲載されることになった。

20年代も後半となって, *Ulysses* は Shakespeare and Company 書店版で七版, 八版と版を重ねていたが, 一方で発禁の地アメリカに於いては Samuel Roth なる人物による海賊版が出回り, Silvia の負担は益々重くなっていた。Joyce の要請で Silvia はこれに抗議する署名を精力的に集め, 何と Einstein までふくむ当時のお歴々の支持を取り付けることに成功した。しかしながら, その様な努力を Joyce の売名行為と冷淡に受けとめる向きも多く, 何ら Shakespeare and Company 書店の所有する版權を擁護し, 作家や出版者に利益をもたらすものとはならなかった。そして, Joyce 本人の最大の関心は既に *Ulysses* には無く, 結局死ぬ直前まで盲目同然の状態でありながら書き続けることになる *Finnegans Wake* の創作の方に移っていた。この作品についても, かつての *Ulysses* の愛読者達の多くが理解不能というてんからの拒否反応を起こして Joyce との交流すら断っていった中で, Silvia Beach はその言語実験の試みと文学作品としての価値を確信する数少ない支持者であった。Joyce は Silvia に直接, 作品の企みについて語り, 書いたものを朗読して聞かせては作品の音楽的側面を実際に伝えていたのである。妻の Nora は決して果たしえず, Pound にも旧友 Frank Budgen にもソッポを向かれた実験的作品の最初の読者であり聴き手の役を勤めたのが, やはり Silvia であったことは注目に値する。Weaver 女史ですら *Work in Progress* にはあからさまに眉をひそめていたのである。したがって *transition* 誌の Eugene Jolas を中心に, その後新しく形成される Joyce と *Finnegans Wake* の理解者, 及び後援者達に彼女の人生最大の重荷であり光明でもあった作家の果てしない要求を委譲する迄, Silvia は常に Shakespeare and Company 書店と共に Joyce を実質的に支えていたわけである。1929年に Samuel Beckett ら12人の執筆陣による *Finnegans Wake* をめぐる初の評論集 *Our Exagmination of Work in Progress* が Shakespeare and Company 書店から出版されたことは, Joyce と Silvia の20年代を締めくくる記念碑と言えるであろう。

けれども, Silvia Beach にも Joyce に振り回されるのはこれで沢山, と言わずにおれない時がきた。*transition* という雑誌の名前そのままに, 時は移り流れも変わる。Silvia にも内的

変化があった。Silvia の書店経営を物心両面で支えもし、時には無邪気に邪魔していたのは、実のところ彼女の家族達であった。赤十字のトラックに乗ってフランスやイタリアの片田舎で労苦を共にした経験を持つ姉の Holly。女優志願でしばしばオデオン通りに出入りし、詩人 Louis Aragon を夢中にさせた妹の Cyprian。初めて Silvia をパリに連れてきて、生涯の大半を一人プリンストンで過ごした父の Silvester (彼はアメリカ大統領 Woodrow Wilson の牧師であった)。三人の娘達をもうけながら遂にこの父との愛情を温めることができず、ヨーロッパに娘達を訪ね歩き、アメリカ西海岸はロサンゼルス郊外のパサディナに趣味のヨーロッパ骨董品店を経営していた母の Eleanor。この母が1927年に彼女の元を訪れているとき、64歳で死んだ。一説によると自殺である。宣教師の娘としてインドに生まれ、幼くして養家に託され、不幸な結婚に心身を疲弊させ、アメリカに根を張ることができずヨーロッパに憧れ続けた母。時には経済的援助も嫌わず、盛んに Silvia と文通して Shakespeare and Company 書店の試みを認めていた、しかしながら常に根無し草だった母が、パリで僅か数ドルの価値しかない装身具を万引きした咎で逮捕され、そのショックに耐えられずに多量の薬を服用して死んだのである。Silvia は他の家族には母の死因を心臓病と偽って、母の名誉と個人的秘密を守り抜いた。Silvia は寡黙に、母の自殺を個人の権利だと認識していたようである。母の危機に際して自分が *Ulysses* の版權騒動に忙殺されていたために、母を救い得なかったという思いが Silvia の方向転換に一石を投じたものと思われる。Silvia も40歳になっていた。

1922年2月2日の朝、ディジョンの印刷所から刷り上がったばかりの初版本 *Ulysses* の最初の2冊を特別に汽車の車掌に頼んでパリ・リヨン駅のプラットフォームに届けて貰い、Joyce の40歳の誕生祝いに手渡した Silvia は1920年代を、ずっとパリの芸術活動の最前線に陣取って体験したアメリカ人女性である。フランス語を完全に自分のものにし、多くのフランス人の友人を持ち、パリに居る外国人たちと親交を結び、アメリカを故郷と呼びながら遂にパリを離れることの無かった Silvia Beach。彼女が Joyce に最も接近していた1920年代は Joyce にとっても作家として最も光を浴びた10年間だと言えるであろう。初版1000部発行と言うのは現代の感覚からみれば余りにも慎ましい数字ではある。しかしその作品の力は遙かに日本にまでも確実に届き、近代作家達の仕事に確かな刺激を与えている。芥川龍之介が生前未発表草稿として小説「若き日の芸術家の肖像」の部分訳を Joyce の作品の邦訳第一号としてもものしたのが大正11年、すなわち1922年で、*Ulysses* のフランス語訳の出版された1929年——明けて昭和4年——には土井光知の *Ulysses* の部分訳を含む詳細な解説が文芸雑誌『改造』誌上に掲載された。1920年代の *Ulysses* フィーバーの真っ最中に直接パリで Shakespeare and Company 書店に出入りして Silvia と知り合い、彼女の紹介で Joyce のア

パートを訪問し、自から西鶴の英、仏訳本を出版した佐藤賢という日本人の存在も知られている。James Joyce の 'headquarters' との誹謗をものともせず、交流のあった文学者達のプライバシーを尊重し、生涯を通じて徹底して優れた人の話の聴き役であった Silvia は、華やかな存在ではない。Man Ray を魅了した Kiki や、Fitzgerald にとっての Zelda、また同時代の女流作家とも Silvia は異なっている。彼女の魅力はセックス・アピールではなかった。きらめくような文才と言うのも違っていた。ましてや第二次世界大戦後出版されることになる夥しい量の Joyce 関連の出版物の書き手達——Joyceans とか Joyce Scholars と呼ばれる学者軍団——の先駆でもなかった。Silvia は Joyce を分析批評する人間ではなしに、喜んで Joyce の作品を享受し、Joyce の芸術家としての人生に实际的な協力を惜しまなかった人間である。

Gabler 版 *Ulysses* のテキストの真正性をめぐって1986年以降開始された今日の論争も、もとはといえば Silvia Beach の初版の段階での Joyce の果てしない推敲・加筆が原因である<sup>(7)</sup>。ある意味で Silvia は Joyce と共に後の世の読者に幾多の謎を仕掛けたまま世を去った共謀者という側面を持っている。*Ulysses* の出版は Silvia の時代も、今日も、そして多分未来においても人々の野心をそそり、いずれかの方からの非難を覚悟しなくてはならない危険をはらんだ冒険である。少なくとも Silvia はその冒険に挑んだ最初の人間であり——女性であった。更に、作者とテキストと読者という関係に、もうひとつ〈出版者〉という要素の加わることの意味を問いかけている人間でもある。出版業がビッグ・ビジネスとなり書き手と読み手の間に大きく介在してくる状況となった今世紀末、文学は変容して行かざるを得ない。

Silvia Beach の開かれた心と、人と人を繋ぐ力と、芸術の鑑識眼がパリ・オデオン通りの小さな本屋を20世紀文学の最も重要な発信地の一つたらしめていたことは *Ulysses* という作品そのものに勝るとも劣らない「事件」であるのは確実であろう。そしてそこから「テキスト」をめぐる今日の喧噪も生み出された。Silvia Beach も James Joyce とその作品も、1920年代に発せられて未だに解答の得られていない20世紀の大きな課題の一部であると思われる。

## 注

本稿は東洋女子短期大学「ことばを考える会」主催シンポジウム「1920年代」（1992年6月4日）に於いて口頭発表した原稿に加筆・修正したものである。

- (1) 1925年に Silvia が企画した Walt Whitman 展は特筆すべきものであろう。
- (2) James Joyce, *Ulysses, The Corrected Text*. Eds. Hans Walter Gabler, et. al. (England: Penguin Books, 1986) 644.
- (3) アーネスト・ヘミングウェイ／福田陸太郎訳 「移動祝祭日」 岩波書店 （同時代ライブラリー 28） 東京 1990, p. 42.
- (4) “Nausicaa” の章の「猥褻」性をめぐっては、拙著「James Joyce の *Ulysses* 第13章 “Nausicaa” 試論——Sentimentality と Sexuality について——」 東京都私立短期大学協会「英語英文学研究紀要

1991」 pp. 27-31を参照されたい。

- (5) Noel Riley Fitch, *Silvia Beach and the Lost Generation, A History of Literary Paris in the Twenties and Thirties*. (England: Penguin, 1988) 11.
- (6) Gertrude Stein, *The Autobiography of Alice B. Toklas*. (England: Penguin, 1966) 229.
- (7) Gabler 版 *Ulysses* をめぐる論争については, Bruce Arnold, *The Scandal of Ulysses*. (England: Sinclair Sterenson Ltd., 1991) に詳しい。

#### その他の参考文献

- Silvia Beach, *Shakespeare and Company*. (Lincoln, U.S.A: Univ. of Nebraska Press, 1991)
- Brenda Maddox, *Nora, The Real Life of Molly Bloom*. (Boston: Houshton Mifflin Company, 1988)
- 小田 基 「20年代・パリ——あの作家たちの青春」 研究社出版 東京, 1987.
- 和田桂子 「20年代のイリュージョン——『ユリシーズ』を求めて」 叢書L'Esprit Nouveau 6 白地社 京都, 1992.